【第 2 回】ヒマラヤキャンプ 2016

Rolwaling Khang 6664m

（ロールワリンカン）

報　告　書

ロールワリンカンをバックにメンバー全員で記念撮影（テシラプチャ峠にて）

１．はじめに
ヒマラヤキャンプに込めた思い

花谷泰広

ヒマラヤキャンプの目的は、ヒマラヤ登山の間口を広げることである。現在のヒマラヤ登山は二極化している。ある程度経験を積み上げた者たちによる登山か、いわゆるガイド登山隊。この流れを否定しようとは思わない。しかし、以前の大学山岳部のような、経験を積む場としての受け皿が少なくなってしまったことに、私は危機感を抱いている。私の初めてのヒマラヤ登山は20 歳の時だった。所属していた信州大学山岳会の OB 組織が、たまたま私が入学した翌年にヒマラヤ登山を計画していたのだ。当時の私は体力には自信があったが、雪山をワンシーズンしか経験していない素人だった。ただ先輩方が与えてくれたチャンスに飛びついただけだった。そして幸運なことに、7035m の未踏峰に初登頂することができた。その時の経験がなかったら、確実に今の私はない。そこで今度は私がそのチャンスを作りたいと思い、このプロジェクトを立ち上げた。幸いなことに、組織が主体になって登山隊を組まなくても、個人が主体的に目的や理念を決めて公募し、登山隊を組織できる時代になった。そしてやるからには、よくある○○周年記念行事などではなく、継続的に取り組むことで人の連鎖を作っていきたいと考えた。

目標とする山の選定は、基本的に私自身が行きたい山に、行きたいなと思った仲間と登る、ある意味純粋な登山だ。初登頂、初登攀にこだわりたい。これは私自身がプロジェクトを続けていく上での、大きなモチベーションにもなっている。これだけ情報が手に入りやすい世の中で、情報がないということほど贅沢なものはない。以前に比べて装備や情報が発達し、政治的にも行きやすくなっているとはいえ、少しハードルが高い海外登山。しかし、最初の一歩さえ踏み出してしまえば、あとは本人の努力次第で必ず未来は開けるものだ。

ヒマラヤキャンプ 2016 では、未踏峰ロールワリンカン（6664m）に、登山メンバー6 名が全員登頂するという大成功で終えることができた。この山を最初にこの目で見たのが 2014 年だった。一目惚れと言うべきだろうか。いつか必ず登りたいと思った。ヒマラヤキャンプ 2015 では、この山の近くにあるランダック峰とランシャール峰に登ったが、この時にあらゆる角度から山を観察することができた。ヒマラヤキャンプで挑戦するには少し背伸びしすぎているようにも見えたが、未踏峰がいつまでも残っている時代ではない。指をくわえて見ているよりも、行ったほうがいい。そんな思いから、今回は「この山に登る！」ということを宣言してメンバーを公募することになった。

この山を確実に登るために、前回は時間をかけて取り組むことができなかったチームビルディングを、今回は本番まで全部で 9 回に及ぶ国内合宿やミーティングで養った。事後の報告まで含めると、ヒマラヤキ

ャンプは全員が一年かけてひとつの目標に向かって過ごす時間となる。

合宿で意識させたことは、「当たり前のことを、ミスなく確実にこなす」ことだ。今さら難しい技術を覚えたところで、今回の登山ではほとんど役に立たない。なぜなら低酸素化で行動する高所登山では、思考能力は確実に落ちる。確実に身についている技術でなければ役に立たない。大切なことは「いま」持っているクライミング技術を、より確実にすることだ。合宿では彼らのロープワークなどを観察し、修正すべき点だけ指摘するようにした。新しく学んだ技術は、クレバスレスキューぐらいではないだろうか。

最もメンバーに求めたことは、歩行技術と生活技術に磨きをかけることである。これらは登山技術の要となる技術だが、とにかく地味だ。しかし山に入っている時間が長ければ長いほど上達する、ある意味ごまかすことができないものだ。つまりはヒマラヤに行くまでに、しっかりと登りこんでおけというメッセージでもあった。

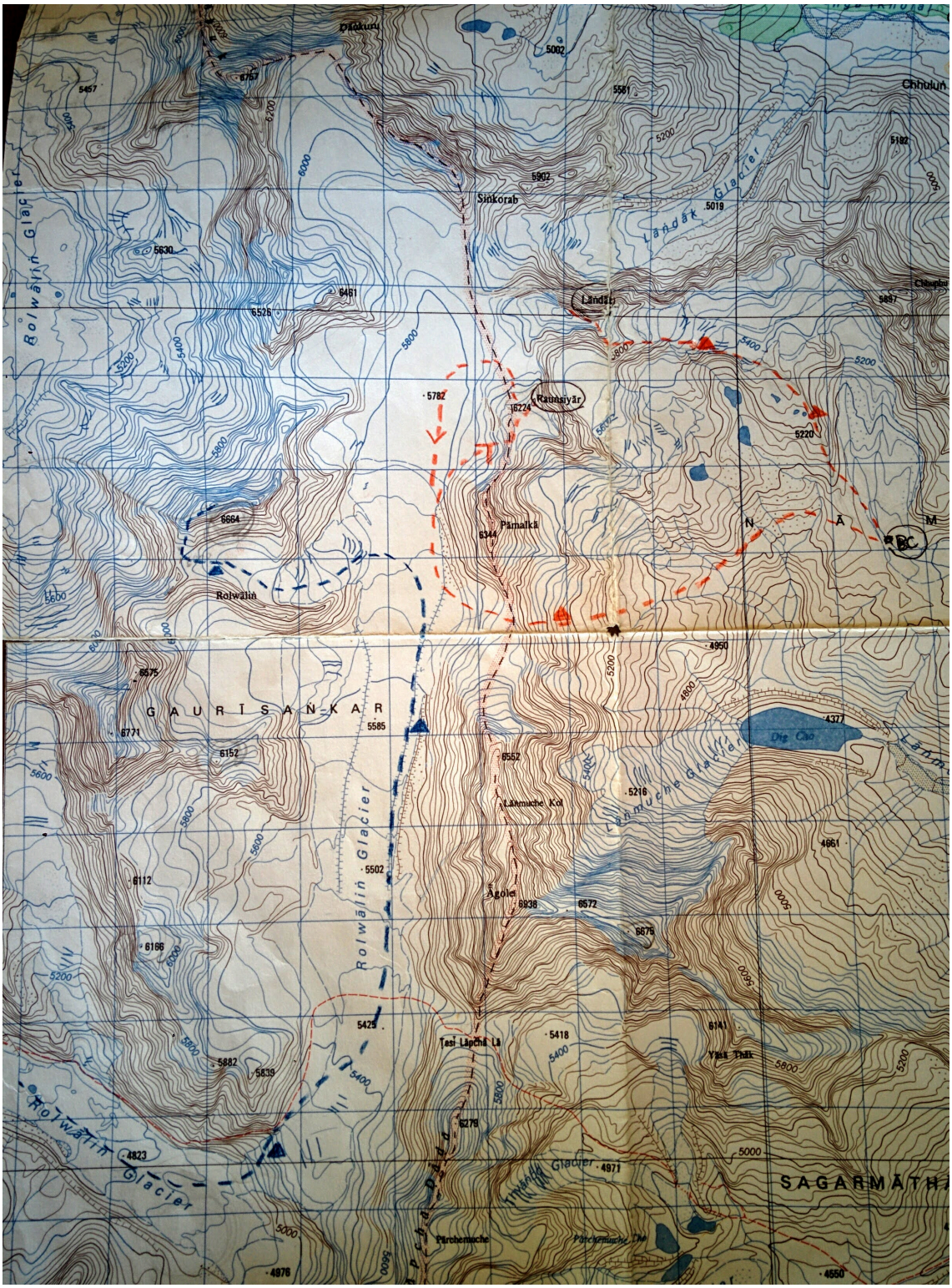
帰国してから、メンバーたちは何を思っているのだろうか。昨年もそうだったが、登頂したことの喜びよりも、自分の力が通用しなかったことに対する悔しさを抱いている者がほとんどではないだろうか。しかしその時は落ち込んでいても、これからどのように山と向き合うか、具体的にイメージができるようになっていると思う。その気付きこそが、この合宿の最大の目的でもある。

私はこのプロジェクトで、ヒマラヤに行くというチャンスや今後のきっかけを提供するだけである。このチャンスから何かを学び、活かすのは参加者次第。これから彼らがどのような道に進もうとも、今回の経験は全て力となるに違いない。しかし一人でも多くのメンバーに、今回の登山を人生の思い出とせずに、より大きな目標に向かって進んでもらいたい。

今後の目標ではあるが、私はヒマラヤキャンプという「システム」を構築したいと思っている。私がいなくなっても稼働し続けるようなプロジェクトにしなければ意味がない。そしてもし同じようなプロジェクトを行いたいという組織や個人が現れたら、私は全面的に協力して、これまで蓄積したノウハウや情報を共有したい。全国から同志が立ち上がることを期待している。

※このプロジェクトは、以下のスポンサー様、サポーター様によりご支援をいただきました。重ねて御礼申し上げます。
【スポンサー】
パタゴニア日本支社、日本コア株式会社、カシオ計算機株式会社（プロトレック）、スポルティバジャパン株式会社、株式会社インパクトトレーディング（スーパーフィート）、株式会社マジックマウンテン（グリベル）、税理士法人横浜総合事務所、株式会社ヤマテン、はちのへ西脳神経クリニック、麻美レディースクリニック、黒瀧眼科医院
【サポート】
株式会社アライテント、株式会社ナンガ、株式会社モチヅキ、ショッツ・ジャパン

順不同、敬称略で記させていただきました。加えて、多数の個人のご支援も賜りました。重ねて御礼申し上げます。



青線・・・ヒマラヤキャンプ 2016 のルート

（※赤線はヒマラヤキャンプ 2015 でのルートを示す）

２．登山報告

（1）キャラバン

9 月 25 日にカトマンズ現地集合。3 日間でブリーフィングなどの登山準備を整えて、9 月 29 日にカトマンズを離れた。ロールワリン地方は、2015 年の地震により大きな被害を受けた地域のひとつである。2015 年も当初の計画はロールワリンからの入山を計画していたが、断念した経緯がある。日本の山岳団体からの支援によって復興した学校などをめぐりながら、高所順応を意識していつもより少しゆっくり進行させた。シーズン最初で道の状態が悪く、当初の計画よりもずいぶん手前にベースを設営せざるを得なかったが、大きなトラブルなく 10 月 5 日に全員揃ってベースキャンプ入りができた。広大なロールワリン氷河のモレーンのど真ん中にポツンと現れたベースは、まるで他の星のような荒涼とした場所だった。

ベースキャンプの様子

（2）偵察と高所順応

ベースキャンプの整備とレストを入れて、10 月 7 日より早速偵察を開始した。モレーン帯は複雑な地形を、石積みをしながらルートを定めていくが、途中から芸術的な石積みをすることのほうがメインになってしまった。ちょうどパルチャモを登って下山してきた日本チームにも話を聞くことができ、上部の状況をほぼ見定めることができた。このあとしばらくは悪天が続くという予報があったが、天気の崩れは少なくてホッとした。例年よりもかなり遅れて 10 月 10 日頃にモンスーンが明けたと思われる。

10 月 11 日より 3 泊 4 日での高所順応と偵察に出た。僕以外は誰もロールワリンカンを見たことがない。メンバーがどういった反応を見せるのかとても楽しみだった。初日は標高 5000m 付近まで。ベースから標高差 300m ぐらいだが、初めて泊まると息苦しさを感じる。有名トレッキングルートとは思えないルート状況で、途中には際どいクライミングもあった。二日目もゆっくりとしたペースで上を目指す。ペースの個人差が大きいので、各自のペースで進む。ほとんど人の行き来がないモレーンで、ルートファインディングだけでなく足元の石が崩れないように気をつける必要があった。5550m 付近にちょうどいいスペースを見つけ、全員で 2 時間かけてゆっくりと整備し、C1 とした。さすがにここまで上がると酸素が薄い。ほとんど眠れない、苦しい夜を過ごした。

三日目の目標は、標高 6000m へのタッチだった。ロールワリンカンの懐に入っていく氷河は、心配していたほど悪い状態ではなく、ほぼ狙っていたラインで高度を稼ぐことができた。ここまで来ると、ロールワリンカンはさらに大きくなって迫ってく

る。しかし初めての高度の影響か、ペースが上がらなかった。

ドラムバオ氷河にて

（3）ロールワリンカン初登頂

10 月 17 日（月）快晴　BC～C１

　スタッフ一同に見送られ BC を出発する。偵察時のタクティクスを改め、事前にデポしておいたモレーン上 5500m付近のキャンプサイトまで向かう。屈折部前後のモレーン歩行は偵察のおかげかスムーズにこなす。しかし、一日で BC からモレーン上 5500ｍまで進む行動は本番で初めて行った行程であった。その為、メンバーの体調が気にかかっていたが脱落者を出さずに全員が C１へと到着する。偵察時に設置しておいたケルンや順応が期待通りの結果を出してくれたが、偵察時と比べると大分モレーンの形が変化していた。花谷・飯田が先行して到着し、続いて順々にメンバーが揃う中、角田が 1 時間遅れでの C１到着となった。1 時間遅れでの到着となったものの、体調は良さそうであったので安心する。C１からは電波が届くので、BC に定時連絡を入れ、食事を済ませ就寝。

10 月 18 日（火）快晴　C１～C２

　昨日の結果を踏まえ、朝から花谷・飯田で先行しての行動開始となった。C１以降はロープを結んでの行動となり、偵察時の赤旗を頼りにＣ２を目指す。偵察時の最高高度を超えて内院コル手前 6100m付近にＣ２を設置する。テント設営は後方隊に任せ、余分な装備をデポし花谷・飯田でさらに高度を上げる。当初の予定ラインを 4 ピッチ程伸ばし FIX の構築を行うが、予想以上に雪質が悪く、安全なスノーアンカーの構築が困難な状況であった。トラバースを行い雪質の改善を期待するものの、依然として支点に使えるような雪質とは言えず、このまま進んでも雪壁の抜け口が良くない。その後、大きくルート変え好条件を探す事となり、一旦下降し再度左方に 100m程トラバースしながら登攀を開始する。高度差にして 200m程登った頃、丁度良いシュルンドが現れたので翌日の登攀具をデポし下降する。

10 月 19 日（水）快晴　Ｃ２～ＰＥＡＫ～Ｃ２

　アタック当日、パーティーを２つに分け登攀を開始する。Ｃ２から三人一組でロープを結び、花谷・角田・石尾パーティー、飯田・吉川・鹿山パーティーで行動を共にする。前日のデポ地にて登攀準備を開始し、花谷・飯田によりザイルをのばしていく。今回の登攀スタイルは三人一組でロープが一本。トップの後に 2 人がいっぺんに登ってくるシステムであった。国内合宿においても何回か経験していたので、システム的にはある程度慣れていた。３ピッチを過ぎた頃、今までは別々にしていたビレイ点を花谷が構築したものに統一し、スピーディーな行動を心掛ける。スノーバーにてとっ

ていた支点も、高度を上げるにつれスクリューの出番が出てきた。雪面を掘り、僅かに出てくる氷と岩を頼りに支点を作る。

確保する花谷、後ろの山はテンギラギタウ

頂上直下の肩に出る手間で 60°近い傾斜があり、合計 6 ピッチのロープを伸ばす事となった。最終ピッチは花谷が先導し、FIX に近い形でロープを固定。続いて飯田、石尾、角田、鹿山、吉川と上がってくる。全員が揃い休憩を済ませた後、一旦ロープを解き 1 本のロープに全員でつながって頂上めがけ稜線を進んでいく。頂上までの稜線は予想していたよりも緩やかで、時折小さなクレバスが顔を覗かせているものの心配していたナイフリッジもなく、一歩一歩ゆっくりと足を動かす。40 分程行動し、現地時間の 13 時 05 分ころ、トップを歩いていた角田が頂上に立つ。続いて飯田、鹿山と頂上に立つが、安定できる場所が 3 畳程しかない為、頂上での集合写真は諦め 20m程下降した先で集合写真を収める。肩まで移動し、下降を開始する。出だしの FIX を飯田が回収してクライムダウンをし、以降は 4 本のロープをローテーションしながら懸垂をする戦略をとった。残念ながら支点は残置となる。全員の下降が終了した後、BC に無線を入れ、C 2 へと帰幕。

10 月 20 日（木）快晴　C 2～BC
前日の疲れが残る中、8 時頃から下降を開始する。滝上のモレーンを渡り切った頃、ダワさんをはじめとしたスタッフが出迎えに来てくれた。また、滝上のキャンプサイトには前川も上がってきてくれ、以降は BC までメンバー全員で下降する。滝を下り、BC までのモレーンを下る頃にはすっかり日が暮れヘッドランプでの行動となった。現地時間 18 時 30 分頃 BC に全員が帰幕。

昨年と比べて難しい山だったが、支点の構築さえできればいつでも退却ができるという、技術的にはやりやすい山だった。しかしいざ登り始めると、まだシーズンが早めだったので、氷が深い雪の下に埋まってしまい、支点を作ることが非常にテクニカルだった。結果としてこの部分は花谷が全て引き受けるしかなく、若手メンバーにはそれをしっかり見習ってもらった。また、花谷以外が 6000m 以上の高所で宿泊したことがないなど、行ってみなければ分からないことばかりだった。まずメンバー全員がよく頑張ったこと、そして天候が安定していたことが全員登頂につながったと分析している。

バックキャラバンは BC マネージャーの前川を加えた 7 名と、サーダーのダワさんの 8 名で、テシラプチャ峠を越えてエベレスト街道に出るルートをとった。ここで初めて前川はロールワリンカンを目にすることができた。峠越えの日は最高の天候で、存分にヒマラヤの景色を満喫できた。

全員で初登頂！！！

３．装備報告

鹿山洋平・飯田祐一郎

登攀：

今回ロールワリンカンを目指すにあたって、事前に撮っていた写真から氷雪壁が中心で、岩がほとんどないと予想していたので、装備も雪の装備をメインに用意し、カムやナッツなどの岩用のギアは軽量化のために持って行かなかった。氷雪壁ではスクリュー、スノーバーで支点を作成したが、途中岩が露出していたので、もし岩用のギアがあれば支点作成の労力を減らすことができただろう。クライミングメンバーが６人ということもあり、ロープはダブルロープ×４を用意し、登攀時は３人ずつ１パーティーで登攀し、下降時はその４本をローテーションしながら懸垂をする戦略をとった。

ハイキャンプ：

ハイキャンプでは今回初めて三人用シュラフを使用した。これはシュラフ内は一つにつながっているが、互い違いに寝ることで独立性も保っているもので、シュラフが一つになり、さらに背面にはダウンが入っていないので軽量化に最適であった。特に今回のような山までのアプローチが長い登山には最適であろう。

テントは三人用シングルウォールを使用した。特に問題はなく快適に過ごせた。

三人用シュラフ

BC 以降実際に持って行った共同装備(登攀具)		
クライミングロープ	8mm60m（マムートフェニックス）	2
	7.7mm60m	2
捨て縄	6mm150cm	12
スノーバー	T 型	6
スクリュー	19cm、16cm、13cm	各 2
アバラコフフック		3
ハーケン	アングル	5
	ナイフ	3
アルパインドロー		10
ダイニーマスリング	120cm、180cm	各 4
安全環付ビナ		4

BC 以降実際に持って行った共同装備（生活用品）		
ストーブ	JETBOIL（SUMO）	2
	予備バーナー	2
燃料	225ml ガス缶	10
水ポリタン	4l+6l	各 1
食器	アコーディオンカップ	6
テント	X ライズ（予備ポール等含む）	2
ツエルト		2
テントマット		2
シュラフ	三人用	2
スコップ		1
雪袋	コンバイン袋、土嚢袋	適

４．食料報告

角田圭輔

<キャラバンおよびBCでの食事について>

キャラバン中Naまでは宿で食事をとり、BCでのメニューはネパール人スタッフのアレンジに任せた。日本から持っていった食材はカレールーやふりかけ各種、海草サラダといったものである。カトマンズでも醤油やわさびといった基本的な日本食は購入可能であった。

BCでの食事については1回だけ問題があった。ある日「春雨のオイルサーディンとトマトがけ」というメニューが出てきた。それがあまりにもメンバーの口に合わなかったため、花谷さんがスタッフに不満を伝えたところ以降のメニューは改善された。ネパール人も慣れない日本料理を作ることになるので、料理の美味しい不味いは、はっきり伝えたほうが良い。

日本から用意した食材はふんだんに用意したので概ね満足だったが、次回以降の改善点として中華料理の素「味覇」も持っていったほうが良い。

ある日のBCでの昼食

<ハイキャンプでの食事について>

計画書から変更した内容はアタック時の食料を増やしたこと、スポーツ飲料の追加の２点である。

1点目、ハイキャンプで消費するアルファ米、カップヌードルを増やした。計画書ではアタックの際２食分のカップヌードルもしくはアルファ米を３人で分け合う予定だった。しかし実際にはハイキャンプでも１人１食分のカップヌードルおよびアルファ米を持っていった。食事を残してしまうメンバーはおらず結果的に正解であった。

2点目として粉末のスポーツ飲料であるShotz electropotionを追加した。もとからアクエリアスは持っていく予定であったが、Shotz electropotionをアクエリアス1袋に対して2袋を混ぜることでより美味しく水分を摂取することが出来た。今回、最高で6100mという標高で幕営をしたが水分摂取に粉末スポーツ飲料は非常に効果的であると思う。

その他の食料の数は計画書から変えなかった。個別包装の飲料（スープ・ココアなど）を1人1日3袋分、緑茶ティーバッグ・アクエリアス粉末を1テントあたりそれぞれ2袋用意したが、こちらは過不足の無い量だった。

<行動食>

日本で調達したドライフルーツ・ナッツは「小島屋」の通販から購入した。りんごやマンゴーなどが非常に美味しかったので来年以降も薦めたい。チョコバーは現地で

調達した。計画書では９０個準備する予定だったが、テシラプチャ越えなどを踏まえてさらに４０個ほど多く購入した。行動食は以下の構成を基本とし、レーションの過剰分から各自追加する形とした。特にアプローチの下部は歩き時間が長く、レーションを追加するメンバーが多かった。

アミノバイタル３個
ショッツ２個
チョコバー１個
ナッツ or ドライフルーツ 50ｇ

食料の仕分け作業

<その他>

　余った食料のうちアミノバイタルやショッツは国内へ持ち帰り、チョコバーなどは現地ポーターの方々に消費してもらった。また輸送中に衝撃で穴の開いたアクエリアスやショッツ、カレーメシなどがあった。これは人手で運ぶ性質上、仕方のないことかもしれないが今後も留意する必要がある。

５．医療報告

前川夏子・角田圭輔

今回の遠征には昨年と同様に医者の帯同は計画されておらず、昨年の遠征に参加した榊原さんに医療品の提供を願った。昨年の医薬品の使用頻度を考慮し、必要最低限のコンパクトなセットを提供していただき、サプリやテーピングなど、日本の山で個人が日ごろから使っているものは個人装備として各自必要量持参することとした。

今回の遠征では重症例は特に出ず、高所の影響による頭痛や顔のむくみはあったものの、頭痛はロキソニンなどの解熱鎮痛剤によって抑えられ、キャラバンや登山活動の進行に支障をきたすような事態にはならなかった。顔のむくみは偵察やサミットプッシュで標高を 6000m 以上に上げ BC へ戻ってくるとひどくなったが、バックキャラバンを行い標高 3400m のナムチェまで下りると 1 日でほぼ元の状態まで回復した。サミットプッシュへの出発前に日本の榊原さんへ衛星電話で連絡しむくみについて相談したが、むくみ以外の高山病の症状が出ていないのであれば問題はないだろうという判断であった。

・BC 以下で使用頻度の高かった医薬品

登頂後、咳をしている風邪気味のメンバーが多かった。しかしそのメンバー全員がPL 顆粒を所定量（1 日 4 回）飲むと在庫がすぐに無くなってしまうため、なかなか薬に手を付けることができなかった。重量との兼ね合いもあるが、次回以降もう少し用意しても良いと思う。また、高所から帰ると指先の爪と皮膚がはがれてきたためゲンタシン軟膏が重宝した。

今回、隊としては酔い止めを用意していなかったが、キャラバン初日の悪路を長時間走るバスやルクラからの飛行機で必須であった。幸いなことに出発前に竹内洋岳さんの隊からわけていただき、事なきを得た。体温計は隊として 1 本用意していたが、個人装備としても 1 本用意されたものがあり便利であった。

・ハイキャンプでの医療品の使用について

頭痛への対処としてロキソニンを使用した。5500m 以上のキャンプでは花谷以外のメンバーは 1 人 1 日 1 錠程度服用していた。隊として用意した数量では使い切ってしまいそうだったので、角田・飯田・吉川は個装のロキソニンを使用した。花谷は膝痛のためロキソニンテープ、ナボールテープを使用した。その他の医薬品は特に使用しなかった。

サミットプッシュ持参薬品			
ボルタレン	2錠	ダイアモックス	6錠
ロキソニン	10錠	ニフェジピン	6錠
ナボールテープ	2袋	Steri-Strip	1枚

2016年ヒマラヤキャンプ 医薬品リスト　Contents of medical care kit					
		処方	英語名	薬量	必要量
内服薬	解熱剤・鎮痛剤	ロキソニン	loxoprofen	60mg	30
	鎮咳剤	フスコデ	Huscode		20
	総合感冒薬	PL顆粒			30
	胃腸薬	ランソプラゾール	lansoprazole	15mg	20
	制吐剤	ペラプリン	metoclopramide	5mg	10
	整腸剤	ミヤBM	Lactic Acid Bacteriae		40
	止痢剤	ロペミン	loperamide	1mg	20
	抗菌剤	クラビット	levofloxacin	500mg	10
		バクタ	Sulfamethoxazole Trimethoprim		40
	抗アレルギー剤	フェキソフェナジン	Fexofenadine Hydrochloride	60mg	20
	高山病	ダイアモックス	Acetazolamide	250mg	30
	高度肺浮腫HAPE)	アダラートCR	nifedipine	20mg	10
	下剤	プルゼニド	Sennoside	12mg	20
外用剤	点眼剤	ヒアレインミニ点眼薬	Hyaluronate	0.3% 0.4ml	10
		リンデロン点眼点耳点鼻薬		0.1%　5ml	1
	鎮痛剤	ボルタレン坐薬	diclofenac	50mg	10
	抗菌剤	ゲンタシン軟膏	gentamicin	0.1% 10g	1
		アクアチムクリーム	nadifloxacin	1% 10g	1
		リドメックス軟膏	prednisolnePrednisolone	0.3% 5g	2
		レスタミン軟膏			
		モーラスパップ	Ketoprofen	6枚入り	10
医療機材	包帯				2
	カットバン				
	傷の閉鎖用テープ	ステリストリップテープ			
	サムスプリント				1
	三角巾				1
	ガーゼ				
	酒精綿				
	テーピング用テープ	伸縮性			
	テーピング用テープ	非伸縮性テープ			
	医療用手袋	非滅菌			10
	爪切り				1
	はさみ				1
	とげぬき				1
	体温計				1
	パルスオキシメーター				1

６．保険報告

前川夏子

昨年の遠征での保険の加入方針も参考にし、今回の遠征では花谷以外は全員日本山岳共済会（以下、日山共）の海外登山保険に加入することとした。日山共の海外登山保険には「救援費用および治療入院費用が補償されるもの」と「救援費用のみが補償されるもの」の２種類のタイプがあり、掛け金も大きく違う。どちらのタイプに加入するかは各自で判断し、手続きは前川がまとめて行った。しかしながら、日山共の保険では３日以上の入院が必要となるような怪我の場合のみ保険料が支払われるため、高山病などでヘリによる搬送を行ったとしても、高度が下がりすぐに症状が改善した場合には保険金が支給されない。そのため各自の必要に応じて Global Rescue 社の会員となることとした。Global Rescue 社のサービス内容は、救護が必要となる事態が発生した際に要救護者側が Global Rescue へ直接電話をし、オペレータに状況を伝え、必要と判断された場合に要救護者の搬送を保証してくれるというものである。３人のメンバーがこれに加入した。

また、今回花谷は日本勤労者山岳連盟（以下、労山）の保険に加入した。この保険は労山に加入後一年が経過しなければ適応されないため、花谷以外のメンバーは選択することができなかった

以下、参考保険料（2016 年９月時点）

日山共海外旅行総合保険

旅行期間	補償内容	保険料
48日	救援者費用500万	10,230円
	治療・救援者費用500万	114,550円

＊2016 年 10 月保険料値上げ

Global Rescue

補償期間	補償内容	費用
90日	Student Type	$359.00
	Medical Only	
	Individual Type	$429.00
	Medical Only	

７．梱包・輸送報告

石尾真穂

１)日本からカトマンズ

最終合宿の 2 日間、メンバーで事務所に集まり、日本から輸送する食糧や日用品の買出し、装備と食糧の梱包作業を行った。既に多くの装備品がカトマンズにデポされていたおかげで、輸送物の総重量は予想より少なかった。EMS などは利用せず、メンバーで手分けしてフライトの受託荷物として直接輸送をすることになった。食糧は、種類ごとにジップロックに入れて防水したものを、コンバイン袋に分けてパッキングし、パッキング済の袋の重量を計量した。装備もコンバイン袋に梱包。袋にはナンバリングして、内容を表にまとめ、誰が何を運ぶのかを把握できる状態にした。リチウムイオンバッテリーは、預け荷物に含めることができないので、機内持ち込み手荷物にふくめた。また、空港で受託荷物が紛失した場合のリスクを最小限に抑える為、一人が一種類のものを集中して運搬するのではなく、種類を分散して運搬するようにした。当日はそれぞれ 100ℓザックと大ダッフルバックを持参するなど、かなり大荷物を持っての出国となった。実際に運搬した荷物の重量は、食糧は 42．3kg であった。共同装備は 23.7kg、更に衛星携帯やパソコン、アクションカム、リチウムイオンバッテリーなどの電子機器の重量が加わる。航空会社の受託手荷物の重量制限は中国東方航空 23kg×2(飯田、鹿山)、中国南方航空 23kg×2(前川)、中国国際航空 23kg×2(吉川)、タイ航空 40kg(花谷)、エアインディア 20kg(石尾)。

2)カトマンズからベースキャンプ

コスモトレックの一部屋に物品を集結し、ダッフルバッグ、ザック、青ダルにパッキングした。個人装備は、キャラバン中に使う物と BC 以降に使う物を分けて、キャラバン中に使う物は一人または二人で一つのダッフルバッグやザックにまとめてパッキングし、その日の宿泊地で部屋に持ち込めるようにした。荷物は全てナンバリングし、共同装備を入れたダッフルバック及び青ダルの中身を記録した。ポーターに運搬してもらう荷物に、施錠などはしなかった。カトマンズからキャラバンの出発地である Gonggar まで、すべての荷物、カトマンズ出発のポーター、ネパール人スタッフ、日本人メンバーが、マイクロバス 2 台で移動した。BC までは 27 名のポーターが一人あたり 30 キログラムの荷物を運搬した。ポーターの手配はダワさんにお任せした。

3）ベースキャンプからカトマンズ

メンバーはテシラプチャ峠越えをして、ルクラから飛行機でカトマンズへ飛ぶことになった。ルクラフライトの荷物の重量が 13 キログラムに制限されているため、メンバーはシュラフや衣類などの最低限の持ち物を持って移動した。共同装備や余った食糧等は、ダッフルバック、ザック、青ダルにパッキングし、17 名のポーター達が往路と同じ道程を運搬した。カトマンズ到着後、テントを干し、シュラフを全てクリーニングに出し、共同装備のデポ品は 3 つの青ダ

ルに入れてコスモトレックの倉庫に保管した。デポ品の内容はタルごとに記録した。

カトマンズデポの装備

4)カトマンズから日本

往路同様、EMS などは使用せず、受託手荷物として共同装備を持ち帰ることができた。帰国後の荷物の集荷が容易になるように、メンバー全員に割り振るのではなく、花谷、飯田、吉川の三人が分担して輸送した。

輸送梱包雑感

往復共に航空受託手荷物として超過料金なしで輸送ができた。梱包には、コンバイン袋とジップロック、重量計が役に立った。以下は私個人の反省点になるが、フライトチケットを購入の際に受託手荷物の上限が 20kg の航空会社を選んでしまい、他のメンバーに負担をかけてしまった。日本からカトマンズまでは、一人当たり 15kg 程度の団体装備を運搬しており、個人装備と合わせると 30kg 以上になる。今後も EMS を利用せずに直接輸送するためには、各自が 40kg 以上の荷物を受託できる条件でチケットを選ぶと良いと思う。

８．会計報告

吉川拓矢・花谷泰広

【収入の部】

◆隊員個人負担金計　　1,700,000 円

30 万円×5 名＝150 万円（飯田、石尾、鹿山、角田、吉川）

20 万円×1 名＝20 万円（前川）

◆協力企業収入　　計 3,560,000 円

合計 5,260,000 円

【支出の部】

◆国内支出　　計 929,888 円

合宿費　　282,471 円

装備購入　　84,856 円

食料品購入　　37,221 円

通信費（通信機器レンタル料・通信料）　268,065 円

外注費（天気予報）　162,000 円

その他　95,275 円

◆国外支出　　計 3,351,833 円

カトマンズ滞在費（宿泊費）　　230,578 円（Rs.118,527＋＄1,152）

カトマンズ滞在費（食費等）　　80,026 円（Rs.83,885）

エージェント支払い　　1,863,744 円（$18,272）

（手数料、登山料、国立公園入園、ネパール人スタッフ日当、装備、保険、輸送費等）

食料品、燃料購入費　　117,728 円（Rs.123,405）

装備購入費　　14,997 円（Rs.15,720）

キャラバン費　　1,037,837 円（Rs.1,087,880）

キャラバン費内訳　日本人メンバー滞在費　159,394 円（Rs.167,080）

ネパール人スタッフ滞在費　19,843 円（Rs.20,800）

ポーター費　725,040 円（Rs.760,000）

その他雇用費（チップ等）　133,560 円（Rs.140,000）

雑費 6,923 円（Rs.7257）

◆花谷経費　　計 445,414 円

国内旅費交通費　　219,509 円

カトマンズ渡航費　　211,905 円
遭難対策費（労山年会費）　　14,000 円

合計 4,727,135 円

【収支】	収入合計	5,260,000 円
	支出合計	4,727,135 円
		532,865 円

※残金は国内合宿費、報告会映像制作費の一部として調整済み

※$1＝102 円（2016 年 9 月）
Rs.1＝0.954 円（1 円＝Rs1.048）で換算
カトマンズまでの渡航費、ビザ代および保険費用は各自負担

当初、エージェント支払い費用とカトマンズでの宿泊費に加え、1 万ドル程度の支出を見込んでいたが、実際には 1 万 3 千ドル弱の費用が掛かった。登山隊の規模が昨年よりやや大きかったため、ポーターの人数が想定より多くなってしまったことが主な要因であろう。ちなみにキャラバンでは 27 人、バックキャラバンでは 15 人のポーターを雇用し、ポーターの日当は 1 日 1,600 円であった。キャラバン中に支払う宿泊代やポーター代、カトマンズでの食料の買い出しに等での交渉に関しては、ほぼサーダーのダワさんに一任していたが、なるべく安く抑えるために力を尽くしてくれた。

キャラバン中の現金の輸送に関しては、メンバー7 人で現金を分担して運んだ。

昨年同様、日本から持ち込む装備は全てメンバーの受託手荷物で運ぶことが出来たため、ＥＭＳ等の輸送手段を使うことなく、費用を抑えることが出来た。現時点では中国系の航空会社はエコノミークラスでも無料で 23kg の荷物を 2 つまで預けることが出来るため、費用を安く抑えるためには非常に便利である。

最後に、両替のレートの関しては、我々がネパールに入国した時点（2016 年 9 月末）で、1 円＝1.03 ルピー程度であり、かなり円高な状態であった。今回は日本から持ち込んだ現金 150 万円をタメルの両替屋で両替したが、交渉の結果 1 円＝1.048 ルピーで両替できた。下山してきた時点（11 月上旬）では、1 円が 0.9 ルピー台まで下がっていたため、タイミングとしてはかなり幸運であったと思われる。

９．メンバーの感想

飯田祐一郎（26）
副隊長、記録通信、装備（副）

「今回の遠征はいつもと違う」
9 月 24 日、中国で 2 回の乗り継ぎを経てトリブバン国際空港に降り立った僕は、そんな思いを今回の遠征には懐いていた。一年ぶりに訪れたカトマンズは一瞬で僕の遠征スイッチを入れてくれ、夜のタメルは華やかな光と多くの外国人旅行客で賑わう。
「『ヒマラヤキャンプ』が、2016 年度参加メンバー募集中」。こんな記事をネット上で見つけたのは去年の１２月頃、来年の遠征をモヤモヤと計画していた僕はヒマラヤキャンプに飛びついた。理由は単純、今回のキャンプではアシスタントの募集があり、募集要項はヒマラヤ経験者。そろそろ自分自身で山のテーマを決めていきたいとモヤモヤしていた僕は、もう一度大きな組織で遠征を経験し、アシスタントという役職からはいつもと違う山を感じられると考えていた。
　10 月 19 日、とうとう迎えたアタック。昨日のデポ装備を回収しザイルを伸ばしていく。期待通り昨日のルートよりは安定しているものの、やはり雪質が悪い。スノーバーが中途半端な刺さり具合なので支点へのテンションに神経を使い、アイゼンとアックスから伝わる感覚に集中しながら距離を稼いでいく。最大傾斜角 60 度、400m 近い高度差の雪面を登りきると安定した肩にでた。全員が到着するのを待ち、そこからは一本のロープで結びなおし最後の緩やかな斜面を登っていく。時間にして 30 分ほど歩いた頃、目の前にピークらしい三角形がみえてきた。そして現地時間の 13 時 05 分頃、メンバー全員登頂という目標を僕達は達成する。
　目的が果たされると時間はどんどんと進んでいきます。
登頂を果たし、バックキャラバンを無事に終えた隊は解散していき、そんな中で僕は一週間近くカトマンズにて一人過ごしていました。この間、一人になると今度はゆっくりと時間が流れるのか、遠征を振り返る時間がたくさんあり、「僕はアシスタントとして何をしたか。副隊長として隊に何が出来たか。描いていた今後のテーマを得る事が出来たのか・・・」そんな事を、太陽のリズムと同じように生活しながら自問自答する日々を送っていました。
冒頭にもある様に、「今回の遠征はいつもと違う」と意気込みながら参加した今遠征。書ききれないドラマが現場にはあり、満足した者、悔しさに泣いた者、既に次を見ている者、色々です。そして僕自身、悔しさに泣いた者の一人でした。東京の家に帰り、いつもの椅子に座りながらキーボードを叩いている今、その自問自答は変わらず、そして終わりがありません。
アタックに向け BC を出る前日。大きな議題はセンターリッジ(バリエーションルート)を狙うか否かでした。センターリッジ登攀に挙手したメンバーは僕と角田。自分達の力の無さを分かってはいたものの、僕等はハッキリと、そして冷静に実力不足を宣告されます。それでも尚、一握りの望みに賭けて挙手を続ける角田。そんな角田を横

目に、僕はセンターリッジ登攀を諦めました。自分自身の実力不足、そして最後まで諦めない角田を引っ張っていけない弱さ。自然と涙が溢れてきました。何故、最後まで粘る事が出来なかったのか。何故、もっと勝負に出られなかったのか。たらればの嵐です。隊長として花谷さんは、リアルなタクティクスは勿論、そんな心の弱さや意志の固さを計っていたのだと思います。それでも僕等の意志が伝わったのか、会議終了後には頑張り次第ではセンターリッジの可能性があると言う話になり、僕等はそんなプレッシャーの中アタックに入ります。頭にセンターリッジの可能性がよぎる中、それでも目の前の山登りに集中しなければいけない状況は、僕と角田だけが味わえた感覚でしょう。このプレッシャーの感覚ってのは良くもないし、だけども悪くもないし・・・なんとも言えない感覚でした。
何か得たいと参加した今遠征。やっぱり現実はそう甘くないですね。一定の成果は得られたものの、僕はもっと大きなものを掴まなくてはいけなかった様に感じています。もしかしたらそれは転がっているチャンスに気付かなかっただけかもしれないし、もっと自分から欲するべきだったのかもしれません。いや、間違いなく気付けていなかったし、欲する力が弱かったと感じています。そんな中でも、頂上までカメラを担ぎシャッターを押し続けた事・・・アタックではルートを作り少しでも隊に貢献できた事・・・最高高度を更新できた事・・・実力不足がハッキリした事・・・
月並みな表現ですが、これらは今後の目標に繋がる大きな収穫だったと思います。僕は人生の中で、自分が選択した事や寄り道って最後にはうまく繋がると思っていて、それは今回の遠征が寄り道って言いたい訳でなく、苦い思いした今遠征もなんとなくうまく吸収して次に繋がる糧になっていく・・・「成長ってこんな風にしていくんじゃないかな」と思っています。
最後に、遠征を行うにあたりたくさんの方々からご支援・ご声援を頂いた事、感謝致します。皆様のサポートあってこその全員登頂である事は間違いがありません。今後も謙虚な姿勢を心掛け山登りを続けて参ります。そして花谷さん、全てにおいてお任せしてばかりでした。いつか花谷さんがウナるくらいに成長してみせます。チャンスを頂きありがとうございました。
みんなにも一言。
なっちゃん→最強マネージャーココにあり。山を続けてね！！
ヨシりん→みんなの良心！仕事にクライミングに頑張ってください！！
石尾→次に向かって突っ走れー↑↑応援してます！！
鹿山→頂上でのあの姿、俺は忘れない。頑張れ！
角田→角田、クライミング中の君の笑顔、素敵です。今後の活躍に期待してます！！

僕も頑張るのでみんなも良い登山を！！

石尾真穂（32）
輸送、食料（副）

20 代後半でヒマラヤ登山を夢見てからなかなか機会に恵まれず、昨年 2015 年 10 月 31 歳で初めてインドで山に登る機会を手にしました。エクスペディションであり、多くの人の協力を得て成功した登山でしたが、登頂後に残ったのは自分達で登ったのではなく登らせてもらった山だったいう物足りない実感でした。次はエクスペディションではなくアルパインスタイルで登ってみたい。未知のものに対して、自分達で考え、自分達の力を出し切って山に登ってみたい、そう思いました。けれど、どうすれば遠い未踏の山に登ることができるのか具体的な進め方が分かりませんでした。そんな時、昨年 12 月にヒマラヤキャンプのことを知って参加を申し込みました。自分が主体的に未踏の山或いは未踏のルートを探し挑戦する具体的な手法、イメージを掴みたいと思いました。ヒマラヤキャンプメンバーの一人として過ごした一年、ロールワリンカン登頂を経て、自分が望んだことを掴むことができたのだろうか? 登頂した直後、胸の中を占めていたのは、喜びよりも強い葛藤でした。胸苦しさの中での登山活動、体力の無さを強く認識したり、頭が働かない状態でただ登ることしかできない状況、今までのクライミング経験を全く役に立てられていない自分への劣等感など、強いネガティブな想いでいっぱいでした。そして、ヒマラヤはやっぱり厳しいということを身をもって感じました。
一回目の順応、偵察のときのこと。初めて 6000 ㍍近くまで到達しました。足元の不安定なモレーンを、荷物背負ってのアプローチに疲弊してしまい全く歩きのスピードがでず、自分の体力の底力の無さを痛感しました。6000 ㍍という標高が体に与える想像以上の負荷に、本当に登れるんだろうか？と、登攀意欲が薄らいでしまったのは辛い瞬間でした。その後一旦 BC に戻り、2 日間心身のレストをする事ができました。本番のアタック中は何があっても受け入れるということと、最後まで粘り強く登ろうということを心に決めました。そして 10/19 は花谷さん､角田君とロープを結んで、最後まで花谷さんがリードで、私はセカンドで登らせてもらいました。順応の成果があり、偵察のときよりも楽に登ることが出来ましたが、やはり頭の働きが悪く判断力も鈍く、もしこれで風雪が厳しい天候となっていたら厳しかったと思います。ただ花谷さんの支点の作り方やロープ捌きを間近で見ていたことは非常に勉強になりました。
登頂してから下山するときは、夕日に照らされた周囲の山や遠くのエベレストなどの山々が本当にきれいで、ここからは一生見ることのない景色だなあと思ってしみじみ眺めたのを鮮明に覚えています。また、登攀メンバーが皆 20 代の中､年長の 30 代としての役割は常に意識していました。中間の年齢としては他のメンバーやリーダーをサポートできる存在でありたいと思っていましたが、逆に皆にサポートされていたようです。ヒマラヤをアルパインスタイルで登る上で、今の自分に何が必要で何が足りないのかを明確に認識させられた今回の経験はきっと今後に活きていくと思います。
登山を続けていく中で、自分も経験を蓄積

して、今回花谷さんからチャンスをもらったように、今まで色々な人にお世話になった分を、いつか次の世代の人や社会に対して返していきたいと思っています。
この二年、海外遠征を繰り返しており、世界各地の人とロープを繋ぐ機会がありました。世界各地の人と山やクライミングを通して対話すること、それは私の夢の一つです。そのためにも自分がクライマーとして経験を積んで総合的な力をつけていくことは勿論ですが、あの氷河上の素晴らしいベースキャンプで感じたのは、今後の登山活動を続けていくベースとなる生活環境を充実させていくことも同じように大事だということでした。
最後に、最後まで様々な形でサポートし、応援して下さった方々、今回のヒマラヤキャンプに参加する機会を与えて下さった花谷さん、ロールワリンカン登頂という目標に向かって共に頑張ったメンバーの皆様のおかげで本当に充実した一年間を送ることができました。心より感謝申し上げます。

吉川拓矢（27）
会計、渉外（副）

帰国して一ヶ月半程が経過しました。帰国直前、カトマンズのホテルのベッドの上で心配していたことは、帰国してしばらくは山のことなんて考えられるだろうかということでした。それくらい心身共に消耗し切っていたのでしょう。
比較的順調に進んだスケジュールの裏で、僕にとっては思った以上に苦しい遠征となりました。
BC に到着した頃から他のメンバーより順応が遅い事に気づき始め、高所順応から降りてきたら、顔が別人のように浮腫んでいました。頭痛を鎮痛剤で抑えながら出発したアタックでは、最終キャンプでお湯を飲むだけで息が上がり、夜中はうなされていたそうです。
当然のように、まともなパフォーマンスも発揮できませんでした。働かない頭と苦しい呼吸の中、必死で付いていって、なんとか登らせてもらったと言った方が良いくらいかもしれません。
高所に体が合わない。体力不足、トレーニング不足。いろいろな要因があるでしょう。とにかく、力の無さに愕然としました。高校生の頃からヒマラヤを想いながら、山を続けてきたので、このことは少なからずショックでした。今まで僕は何をしてきたのだろう…
しかし、遠征中はなるべく前向きに楽しく取り組もうと思っていたし、そもそも毎日が想像以上に大変で余裕もなかったので、あまり何も考えられませんでした。
　でも今帰国してきて、通勤電車の中で思うことは、今後の山への取り組み方、やりたいこと等々。本当はこれらの事をいろいろ考えたくて遠征に参加したはずなのに、答えはまとまらずじまいでした。
　カトマンズのベッドの上での心配は杞憂に終わり、先日は山仲間との飲みの席で、次の遠征の話までしてしまいました。会社にはもう遠征には行かないという誓約書を出したというのに。
　多くの屈辱を今回の遠征で味わいましたが、これはこれでよかったのだと今は思っています。今はとりあえず、日本でもっと

登りこみたい。結局のところ今回の遠征でわかったことは僕には力が無さすぎるということでした。僕はヒマラヤ登山をなめていたのかもしれません。僕にはまだ、日本で登りこむ必要があるし、またできることなら、大きな目標に登りたい。今度はもっと自分の力を発揮できるように、その日のために。

遠征中、苦しい時に思い浮かんだのは家族や友人など今回の遠征を応援してくれた方々のことでした。お陰で何度も「こんなところで終わってたまるか！」という気持ちになれました。過程は納得のいかない部分もあるものの、登頂という結果を出せたのは本当にそのおかげでした。

そして花谷さんを始め、ヒマラヤキャンプのメンバーのみんな、仕事だとかなんとか言って、合宿や準備にあまり参加できなかったにもかかわらず、最後まで付き合ってくださり、本当にありがとうございました。熱くて面白いメンバーとヒマラヤに行ったことは大事な思い出です。というかこれからも機会があれば一緒に登りたいです。どうぞこれからもよろしくお願いします。

角田圭輔（24）
食料、保険医療（副）

初めて行くネパールの地は全てが新鮮でした。どことなくスパイスの香りがする空港、安い偽ブランドだらけのアウトドアショップ、道端で気持ち良さそうに寝ている犬たち。タメルで掴まされた質の悪いトレッキングシューズをキャラバン中毎日補修したことも良い思い出です。そしてネパール人ポーターの強さには驚きました。擦り切れたサンダルを履いたおっちゃん、リゾートバイトに来るような格好の兄ちゃんが重い荷物を担いで足場の不安定な所も越えていく姿を見たことで、花谷さんが言っていた通りたしかに体力の評価基準が変わりました。標高 6000m から見た空の色は忘れられません。一面が濃紺色に染まり、ヒマラヤに来たのだと感無量でした。頂上からはたくさんの山々が見え、文字通り一生かかっても登りきれないほど無数の頂でした。ロールワリンの頂上にたった瞬間は純粋にとても嬉しかったです。正直なところ花谷さんがいるという安心感が背後にあったと思います。しかしそれでも普段の登山で味わったことの無い感動でした。

去年ロールワリンカンの写真を見た瞬間、脊髄反射的にヒマラヤキャンプへの応募を決めました。青い空にそびえる恐竜の背骨のようなセンターリッジ。現実には写真とは別のルートから登り、その取付きのシュルントですら気圧されて震えロープもまともに畳めませんでした。また登りも花谷さん飯田さんに頼りっぱなしで延々とフォローするだけでした。夢想することと実際の自分の実力に大きな隔たりがあることを突きつけられました。一つの大きな収穫といえる点は花谷さんが確実な下降支点を作り降り続けていく姿を見たことです。降りられる壁なら取り付けるという気持ちは、次の大きな山や遠征へ行く手がかりになりました。

自分なりの速度でもイメージと現実を近づけていくという作業を続けていきたいです。

花谷さんへ
　6 人を引き連れてヒマラヤへ行く、その重圧は今の自分には想像もつきません。気も回らずどんくさい自分ですが連れて行って頂き、本当にどうもありがとうございました。

鹿山洋平（24）
装備、輸送（副）

この遠征を振り返ってまず一番に思い出す情景としてはやはり頂上稜線を歩いている時のことです。このヒマラヤキャンプが初めての遠征で、今年はこのためだけにトレーニングをしてきました。精神的に辛い時もありましたが、出来ることはやったという思いで遠征に出発しました。自分にも何か出来ると思っていました。しかし蓋を開けてみれば、最後の雪壁の登攀はほとんど飯田さんに頼りきりで、「自分が行きます。」と喉のすぐそこまで出かかっていたのに言えずじまいでした。ロールワリンカンという初めて見る大きい山に完全に圧倒されていたのだと今になって思います。そんなこともあって頂上稜線では自分はこの約一年間何をやっていたのだろうと、途方に暮れ、綺麗なはずの景色がぼやけて見えました。ただこの悔しさのおかげで、この先自分が何をすればいいのか、何がしたいのか、遠征前に比べると明確になりました。こんなに悔しい思いをして、正直辛かったにもかかわらず、それをバネにして生活しようとしている自分は本当に山が好きなんだなと感じます。それだけで自分にとってこの山に登った価値はあったんだと思います。
こう言うと苦い思い出ばっかに聞こえますが、BC の生活やキャラバンは本当に楽しいものでした。皆で BC 近くのボルダーに行き、最高の天気の下、ああでもないこうでもないと言いながら課題を作って登るのは、ボルダリングが大好きな自分には最高の時間でした。毎晩メンバーと馬鹿話や、個人的な話をして楽しんだのも良い思い出です。
自分のヒマラヤキャンプはこれで終わりですが、自分の登山、クライミングはこれから始まります。少しヒマラヤからは遠ざかることになると思いますが、トレーニングし、精神的にも強くなったら近い将来必ず、キャラバン途中に見たかっこいい、大きな壁を登りに戻って来ます。その時はまた応援よろしくお願いします。
最後に、Facebook でいつもコメントしてくれた方、応援のメッセージをくれた方、影で支えてくれた方、何よりヒマラヤに行きたいというとんでもないことを認めてくれた両親、本当にありがとうございました。

前川夏子（22）
保険医療、記録通信（副）

　ヒマラヤキャンプへ参加するにあたっての想いはほかのメンバーとは違っていました。それは私の役割が登頂を目指さない BC マネージャーというものだったからという理由だけではありません。大学の山岳会を辞め一度は山から離れた身であるということの負い目がありました。それでも

Facebook でたまたま見つけたヒマラヤキャンプ 2016 のメンバー募集記事にどうしようもないほどのときめきを覚え、衝動を抑えられないままに応募し、花谷さんから「一緒に行こうか」と返事をもらうまで私はとても浮かれていました。しかし、それから 9 か月間の国内での準備期間において、たいして山にも登れない私のできることはとても少なく、さらに BC マネージャーが具体的にどのような仕事をするのかイメージしきれなかったため、出発前はかなり不安がありました。BC マネージャーの仕事は BC 入りしてからが本番です。偵察やサミットプッシュへ向かうメンバーを笑顔で送り出し笑顔で迎えること、行動中の本隊と無線で連絡をとりあうこと、そして日本で応援していてくださるみなさんへ Facebook を通して隊の動向を伝えることが私の主な仕事でした。送り迎えはダワさんに、無線と FB 更新は花谷さんに、機材の使い方は飯田さんに、どれも現地であれこれ教えてもらい付け焼刃でやっとできるようになったことばかりで、本当に任せて大丈夫だろうかと心配されていたと思います。実際にはすべての仕事がやろうと思えば誰にでもできることでした。ですがあの場所では間違いなく私にしかできないことでした。なんとか役に立ちたいというその一心で毎日 PC に向かっていました。メンバー6 名が全員そろって登頂を果たしたという無線が入ったとき、言い知れぬ感動と震えと一時的な安心感と早く伝えなくてはという焦りと、いろいろな感情が入りまじっていました。今思い出しても高揚します。この瞬間の感動を味わうためにここに来たのだと実感しました。

今回の遠征での私の最高標高はテシラプチャ峠の 5,755m でした。この峠を越えるにあたっては花谷さんとダワさんにフォローしていただき、登山メンバーに荷物を担いでいただき、完全におんぶにだっこで連れて行っていただきました。ここでの収穫は自分の身体がこの標高に耐えられるということが分かったことと久しぶりに歩いた雪（正確には氷河）の上がものすごく楽しかったことでした。こんなに贅沢な経験から悟ったこととしてはあまりに貧相で似つかわしくない感想になってしまいますが、私は山が好きです。これまでたくさんの方に心配をおかけしましたが、私はこれからもどんな形であれ、山を続けていきます。

この一年間弱の活動ではたくさんの人と出会い、たくさんのことを吸収することができました。生活環境もバックグラウンドも違う人たちが集まり短期間でチームを作るということの難しさを知りしましたが、生活を共にするなかでお互いのことを知り急速にチームになっていく感覚がおもしろくもありました。一度は山から逃げた私をヒマラヤまで連れていってくださった花谷さん、ありがとうございました。右も左もわからないような私をたくさん助けてくださった飯田さん、吉川さん、石尾さん、鹿山さん、角田さん、ありがとうございました。つたない文章での Facebook 更新にも温かく見守ってくださった方々、そして私のヒマラヤへの挑戦に理解を示してれ、送り出してくれた家族にも感謝申し上げます。

行動概要

9/25　カトマンズ集合
9/26～28　登山手続きおよび準備
9/29　KTM～Gonggar
9/30　Gonggar～Simi
10/1　Simi～Dongang
10/2　Dongang～Beding
10/3　Beding～Na
10/4　Na(Stay)
10/5　Na～BC4700m
10/6　BC（Stay）
10/7　BC から屈折部まで偵察。花谷・吉川は屈折部まで行かず
10/8～10　BC（Stay）
10/11　BC～滝上キャンプ地
10/12　滝上キャンプ地～モレーン上 5500m
10/13　モレーン上 5500mから内院偵察 5900mまで。CS に登攀具をデポ
10/14　モレーン上 5500m～BC
10/15～16　BC（Stay）
10/17　BC～モレーン上 5500mCS１
10/18　モレーン上 5500mCS１～内院コル手前 6100ｍＣＳ２　花谷・飯田で先行し、
　　上部偵察
10/19　内院コル手前 6100ｍＣＳ２～ＰＥＡＫ～内院コル手前 6100ｍＣＳ２
10/20　内院コル手前 6100ｍＣＳ２～BC
10/21　BC（Stay）
10/22　BC（Stay）
10/23　BC～滝上キャンプ地　花谷は翌日、ＢＣ撤収後に合流
10/24　滝上キャンプ地～Tashi Labsta La（テシラプチャ峠）～Tempo
10/25　Tempo～Namche（ナムチェ）
10/26　Namche（Stay）
10/27　Namche～Lukla（ルクラ）
10/28　Lukla～KTM 観光省にてブリーフィング
10/29　装備片付け
10/30　装備片付け並びにスタッフを交えて食事会
11/01　解散